【事業概要】

１．名称　　：程島共同墓地　木造　地蔵菩薩坐像
２．員数　　：１躯
３．修理期間：２０２１年２月１日～２０２１年８月１日
４．所在地　：－
５．連絡先　：程島墓地組合
６．施工者　：古仏修復工房

【法量】 ※修理完了後

・地蔵菩薩坐像

像本体	像高	30.5cm	最大幅	22.1cm	最大奥	21.2cm
	髪際高	27.7cm	最大高(持物含む)	35.3cm		
光背	最大高	24.3cm	最大幅	19.2cm	最大奥	4.4cm
台座	最大高	44.2cm	最大幅	39.1cm	最大奥	38.1cm
全体	総高	83.8cm	最大幅	39.1cm	最大奥	39.3cm

【品質構造】

・地蔵菩薩坐像

木造（桧材）、一木造り。玉眼。現在残る最も古い痕跡としては、肉身部は漆箔、衣は漆仕上げだが、制作当初のものかは不明。

頭頂より像底まで主要体幹部は一材。内刳りは施さず、像底を刳り上げる。面部を割り矧ぎ、玉眼を嵌入する。膝前材は横一材を体幹部に接合する。両手先は別材。面部及び頭部の接合面に造立銘があるほか、像底及び台座に修理銘が記される。

【墨書】

・頭部（面部接合面）

高岡村仏師右京
作也年六拾八才
（ほ）（し）
本と志ま村寶蔵院
寶永元年四月日

※宝永元年（甲申）　１７０４年

・面部（内刳り内部）

ほと
（し）
志ま村
寶蔵院
寶永
二年
卯月
吉日

※宝永二年（乙酉）　１７０５年

・像底

維時
明治廿八年
旧二月
修膳之

※明治二十八年　１８９５年

・台座（蓮肉　上面）

相州鎌倉八幡前
大仏師玄□
隼人作

・台座（蓮肉　底面）

奉再興地蔵尊
明和二乙酉六月
代座新（木）ニ代□
大仏師玄□

※明和二年（乙酉）　１７６５年

・木板　表面（蓮肉上部に取り付け）

明治二十八年
旧二月修覆
世　小林嘉平
ハ　同　平内
人　同　才一郎

※明治二十八年　　１８９５年

・木板　裏面（蓮肉上部に取り付け）

大工　古山　新井巳之吉
葺師　ヒロ　稲見傳八
画師　谷田貝　枚山角三郎
明治二十八年二月修
フク

※ヒロ　桶口　のことか

【所見】

頭部接合面及び面部内刳り内部に造立銘が記される。それによると地蔵菩薩像は宝永元年（１７０４年）から宝永二年（１７０５年）にかけて制作されたようである。仏師は高岡村の「右京」。６８歳の時の作とのこと。高岡村は現在の真岡市の一部。近隣の仏師の作とわかる。

この地蔵菩薩像は、ほとしま村（程島村）の「寶蔵院」に安置されたようであるが、寶蔵院については現在では残っておらず詳細は不明。寶蔵院の敷地の一部が現在の程島共同墓地になった可能性はある。

造立銘の他に修理銘が２つ残る。古いものは明和二年（１７６５年)。「相州鎌倉八幡前大仏師玄□　隼人作」とある。「代座新（木）ニ代」の文字が残ることから、おそらく台座をこの時期に新調したようである。地蔵菩薩本体も漆の塗り替えが行われているがこの時期のものか。

次に記録が残るのは明治二十八年（１８９５年)。この時の修理は、記録から仏師の手によるものではなく、大工と彩色師によるものであったと思われる。また、葺師の名も書かれていることから、おそらく御堂の修理と一緒に仏像も修理されたのだろう。修理としては台座の蓮肉以下、岩座部分が新造され、全体に彩色が施されたのがこの時期と考えられる。この時期の修理銘については、世話人や作業者の名は書かれているものの寺院の名前は書いておらず、すでにこの時期には寶蔵院は廃寺になっていた可能性が高い。

※高岡村　旧山前村の一部

【修理基本方針】

・欠失、亡失箇所については復元する。
・新たな補修箇所については色合わせを行い、全体の統一をはかる。
・墨書は記録する。

【損傷状況】

全体に部材の接合が外れており、面部についてはビニール紐で脱落を押さえている。左手先後補。右手先亡失。彩色の（後補）の剥落がひどいが主要部材は残っている。

光背は亡失。台座についてはすべて後補。蓮肉が明和二年（１７６５年)、岩座が明治二十八年（１８９５年）に補作されたと考えられる。なお、蓮肉（後補）がやや小さい。岩座は杉材からの彫り出し。底面が歪んでおり安置する際にがたつく。

・本体

① 欠失、亡失個所について
・亡失個所がある。（白毫。玉眼押さえ。右手先。右袖口。持物※錫杖、宝珠。金具類など。）
・削れや小欠失個所がある。（面部や裳先、背中など複数個所。）

② 部材の接合について
・すべての部材の接合が外れ、半壊状態。
・背中に光背の受けを取り付けていた痕跡がある。
※但し、制作当初のものかは不明。
・地付きが平らでないために安置するとがたつく。

③ 後補個所について
・左手先は後補材。
・彩色の塗り直しが行われている。
・漆の塗り直しが行われている。

・光背

① 亡失

・台座（後補）

① 欠失、亡失個所、割れについて

・岩座の左下部分が大きく欠失している。

・蓮肉、岩座部分共に大小の干割れが生じている。

② 部材の接合について

・岩座の上面が反っており、蓮肉を適切に取り付けることが困難。

・岩座の底面が反っており、安置するとがたつく。

③ その他

・部分的に彩色の剥落が生じている。

・明治期の修理銘札が蓮肉上部に取り付けられているが、像を蓮肉に乗せる際に邪魔になる。

【修理仕様】

地蔵菩薩像については、手先、持物は新造し、面部や膝前材など外れている部材は再接合する。像底ががたつくため、膝前材の底面に薄板を入れ、がたつきを調整する。仕上げについては、後補の彩色と漆層は可能な範囲で除去するが、除去した後、古い漆層と木地の部分で違和感が出るため、部分的に漆を塗り直す。

光背については新造する。また像の背中にホゾ受けを作る。台座については、蓮肉、岩座共に後補であるが再使用する。また、安置する際にがたつくため、岩座の下に框を新造する。

・本体

① 欠失、亡失個所について

・亡失個所は新造した。

（白毫。玉眼押さえ。右手先。右袖口。持物※錫杖。宝珠。金具類など。）

・削れや小欠失個所は以下の処置をした。

パテで形を補った。（面部や背中などの小さな削り痕。）

桧材で形を補った。（裳先の小欠失部分。）

② 部材の接合について

・接合個所は解体し、再接合した。

・背中に光背のホゾ受けを新造した。

・安置するとがたつくため、膝前材の底面に薄板を貼り、がたつきを調整した。

③ 後補個所について

・左手先（後補材）は撤去し、新造した。

・彩色の塗り直しは除去した。

・漆の塗り直しについては可能な範囲で除去した。

④ 仕上げについて

・古い漆層と木地の部分で統一感がないため、部分的に漆を塗り直した。

・光背

① 輪光背を新造した。

・台座（後補）

① 欠失、亡失個所、割れについて

・岩座の左下部分の欠失は桧材で補った。

・蓮肉の干割れについては、パテで埋めた。

・岩座部分の干割れについては、目立つ部分は埋めた。干割れの大きさに合わせて木屎漆及びモデリングペーストを使用した。

② 部材の接合について

・岩座の上面に、薄材を足し、がたつきを調整した。

・岩座の下に框を新造し、安定をはかった。

③ その他

・蓮肉の後補彩色については除去した。

・岩座の彩色については剥落止めの処置をした。

・明治期の修理銘札は取り付け位置を岩座背面に移動した。

※　接合にはエポキシ系接着剤を使用した。

※　パテはエポキシ系のパテを使用した。

※　彩色層の剥落止めにはメチルセルロースを使用した。

※　補修箇所は色合わせを行い、全体に色調の統一をはかった。

【写真】

①［修理完成写真］

全景（正面）

全景（背面）

全景（右側面）

全景（左側面）

本体（正面）

本体（像底）

②［修理前写真］
全景（正面）
全景（背面）
全景（右側面）

全景（左側面）
本体（正面）
本体（像底）

③［墨書］
頭部（面部接合面）
面部（内刳り内部）
像底

台座（蓮肉　上面）
台座（蓮肉　底面）
木板　表面（蓮肉上部に取り付け）

木板　裏面（蓮肉上部に取り付け）
取り付けられていた木札の様子
※

④［解体写真］
本体１
本体２
台座

⑤［新補個所］
全景（正面）
全景（背面）
本体（正面）

頭部　内刳りの様子
修理銘札の取り付けの様子

古仏修復工房

【写真】

①［修理完成写真］

全景（正面）

全景（背面）

全景（右側面）

全景（左側面）

本体（正面）

本体（像底）

②［修理前写真］

全景（正面）

全景（背面）

全景（右側面）

全景（左側面）

本体（正面）

本体（像底）

③［墨書］

頭部（面部接合面）

面部（内刳り内部）

像底

台座（蓮肉　上面）

台座（蓮肉　底面）

木板　表面（蓮肉上部に取り付け）

木板　裏面（蓮肉上部に取り付け）

取り付けられていた木札の様子

※

④［解体写真］

本体１

本体２

台座

⑤［新補個所］

全景（正面）

全景（背面）

本体（正面）

頭部　内刳りの様子

修理銘札の取り付けの様子